みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

高齢者のウェルビーイングとライフデザインの協働：共同研究：ウェルビーイング（福祉）の思想とライフデザイン（2008-2011）

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-03-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 鈴木, 七美 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5139

PROJECT

高齢者のウェルビーイングとライフデザインの協働

文・写真
鈴木七美

共同研究 ● ウェルビーイング（福祉）の思想とライフデザイン（2008-2011）

高齢期のウェルビーイング

多様なウェルビーイングのありかたに関し考察を深めるとともに、それらを調整しながら創り続ける生活空間の共有の方途を探るという、共同研究の具体的な研究対象の一つとして高齢期の暮らしに注目してきた。だが、高齢者の日常に関する話を聞くと、いつも私は恐怖に似た感情にとらわれる。たとえ健康に恵まれていたとしても、多くの人が、必要に応じて生活支援を受けられるよう新しい場所への移動を検討している。移動しても、より多岐にわたる支援が必要となったり病気になれば、さらに新たな場所へ移らなければならない。自宅で生活支援を受けることに決めた場合でも、それを維持できるのかという不安がつきまとう。選択を迫られる事態に遭遇すると、変化に対処せざるを得ないという落ち着かなさがしばしば表出される。長年ともに暮らしてきた伴侶を失うことも、生活のリズムに大きな変化をもたらす。



ミーティング「ライフケア・コミュニティの構成と活動について」への参加。参加者：住人（＝ボランティア）、ボランティア・コーディネータ、看護師、牧師、ソーシャルワーカー、高齢者用住居施設の責任者（2011年11月、アメリカ合衆国、ペンシルヴェニア州）。

移動にしても生活支援を受けるにしても、否応なしに新たな関係性を築くという課題に向かわなければならない。孤立が危険で孤独が寂しいものではないかという心配と同様に、慣れ親しんだものと訣別し、新しい環境で関係性を構築せざるを得ないというのは、重いテーマである。そこで私たちは、高齢者の暮らし空間の可能性とその構成、創出過程を検討するために、高齢者が語る多様な「ウェルビーイング」（心地よい暮らし）とその実現に向けた調整的活動「ライフデザインの協働」をその文化的背景とともに検討してきた。その成果を『高齢者のウェルビーイングとライフデザインの協働』（鈴木七美・藤原久仁子・岩佐光広編、御茶の水書房、2010年）としてまとめた。

本書で明らかになったことの一つは、高齢者は弱者やマイノリティとして周縁に位置づけられる者ではなく、自らと周囲へ配慮することによって関わりを紡ぐ存在だということである。高齢化・過疎化が進行する町、災害を経験した村の産業振興・復興に加わる高齢者と外来者は葛藤・齟齬を経験するが、暮らしの場を築くという目的のために、人々は森などの環境をも包括するケアを続ける。そしていつしか生活の場の創出とその変化につながっているという包摂の感覚を得るのである（1章「ケアする──ライフデザイン協働の時空間へ」、4章「つなぐ──災害復興地における地域社会づくりの取り組み」）。

また、高齢者がウェルビーイングとみなすことの一つとして、親しみや安心感のある場で暮らすということがあげられる。だが、唯一の文化を称揚し閉じた「コミュニティ」に暮らすことばかりが追及されるわけではない。カナダでは「エスニシティ」に配慮し食文化や年中行事の充実を図る高齢者用住居施設が創設されてきたが、中国系・日系高齢者が共有する施設の試みもなされている。「異なる文化」の存在によってアイデンティティが意識されるというが、それを探る活動が、個々のライフヒストリーを再構成するウェルビーイングに関わる時間と捉えられることもある。外に経路を開くことで齟齬や葛藤をも生かしてゆくという姿勢に注目し施設間の調整を図るアウトリーチの具体的な技術にも言及した（5章「広げる──日系高齢者施設のアウトリーチ」、6章「夢みる──バンクーバーにおける移住高齢者の生活とコミュニティ」、8章「探る──ブラジル日系高齢者のアイデンティティとウェルビーイング」）。

さらに、ウェルビーイングに関わる活動として、ライフロング・ラーニング（生涯学習）、看取りへの参加、死別ケアなどの活動が閉じた施設内だけではなく外部者やシステムとの協働によって実践されてきたことを示した。それらは、自らが生きる世界を解釈することによって包摂に向かう活動とみられ、さまざまな問いに応えるために、多くの異なる知の結集が不可欠である。そこで用いられる言葉は、専門職者から発せられるものとは限らない。日常生活においてはケアの専門職に支えられる高齢期の暮らしだが、問い応えるという共同作業には、ヴァナキュラーな言葉が不可欠なのである（3章「寄り添う──福祉・教育の複合施設『楚洲あさひの丘』」、9章「深める──『良い死』の外側へ」）。

世界への包摂の感覚は、現世の言葉による交流によってのみ達成されるわけではない。新しい景色を見て風を感じることや、信念・祈りのありようを問う時間も重要だ（7章「旅する──ウェルビーイングにおける『遊び』の重要性」、10章「巡る──岡山県井原市『嫁いらず観音院』に託する高齢者の想い」）。

高齢期のウェルビーイングを辿る過程で、生きていてよかったと身の底で感じる瞬間があるということ（2章「生を養う──ウェルビーイングの射程」）、誰もが生きてきたことに拍手を受けることができるような関係性と共有の時間をもつこと（11章「渡る──世界や宇宙と響き合う物語へ」）などに関し、すべての世代の人々のエイジング（後戻りのできない人生を生きる）に関わる課題の具体相として考察を深めた。

デンマークの“Healthy Aging”研究

近年、「高齢期や高齢化」に関わる研究や実践に関し「ヘルシー・エイジング」という言葉がしばしば使用されている。この語にどのような意味あいが込められているのかを検討するのが、今年度私たちが取り組んでいるテーマの一つだ。以下

では、デンマークにおけるセミナーや聞き取り調査で得られた情報を提示する。

コペンハーゲン大学では2010年度からCenter for Healthy Agingにおいて大規模プロジェクトを開始し、デンマーク国立社会研究センター、デンマーク教育大学でも、高齢者に関する研究プロジェクトを立ち上げ、具体的な提言をも視野に収めた研究を進めている。いずれも、文化人類学者を中核として高齢期のウェルビーイングを探っている。

もちろん、Healthy Agingという語の登場や意味あいを問う作業も行われている。というのも、家庭や学校教育においても社会を構成する人々の「自律」の重要性が繰り返し言及されてきたデンマークでは、それゆえの問題として、「自律」を十分に実践できないことへの恐れがむしろウェルビーイングを縮減させている傾向が観察されるからである。たとえば、在宅で暮らす高齢者が、生活を快適にするための提案や支援を受けることを躊躇し孤立することもみられるという。また、「自立」に関する高齢者支援の現状についても、疑問点が指摘されている。高齢者の孤立を避け健康を増進する目的でアクティビティ・センターの充実が図られているが、高齢者の支援をする者の心がけとして重要な態度は、「ポケットに手を入れておく」こととされている。服の着脱をはじめ、高齢化に伴い時間がかかり難しくなった行動を助けてばかりいると、さらに身体機能が低下すると考えられているからである。だが、手をさしのべることを控えて見守るだけの支援者と高齢者は、「自然でない」行動によって、いずれも満足感や安心感を得られない傾向があると報告されている。そもそも、成長してゆく子どもたちと高齢者に、同じような自律／自立の様式が提示されることにも疑問が投げかけられた。



ロウソクのある食卓(2011年3月、デンマーク、モーレウ市)。

必要な生活支援を24時間行うシステムが整っている場合でも課題となっていることとして、専門職によって細分化されたサービスを時間にそって行う場合、高齢者が望む会話や交流は十分に行えないという点があげられた。この問題に関しては、高齢者の希望・不満を調査したデンマーク国立社会研究センターの若手研究者の提言により、今年度はコペンハーゲン市で補助金による交流時間の確保が実現したという。



セミナー「デンマークにおける高齢者のウェルビーイングと自律／自立の思想・実践」開催(2011年3月、コペンハーゲン市、デンマーク教育大学)。

ロウソクの灯りが照らし出す世界と語りの時間

新たな関係性の構築を迫られる高齢期は、アイデンティティを同じくしているとは限らない人々が、移動に不自由があってもさまざまな活動可能性に開かれているという「自由」や、生活支援が豊かに得られる利便性と安全性などを得るために、生活や活動の場でともに過ごす時期でもある。しばしば「ライフケア・コミュニティ」とも称されるこうした場は、住み心地や関係者の心地よさを追求するという共通性により、一歩一歩創り続けられる空間となる可能性がある。

この点に関してデンマーク教育大学における先述のセミナーでは、デンマークに特徴的な「語りあいの世界は創るもの」という考えが紹介された。アンデルセンの『マッチ売りの少女』でも知られる冬の長いこの国では、灯りが大切にされている。家やカフェの夕べのテーブルにおかれるロウソクの灯りは明るすぎたり広範囲をいっせいに照らし出したりしないほうがよい。小さな灯りに集う人々は、他にもあまたに存在する灯りのひらめきを感じつつじっくり語りあう伝統があるという。

こうした時間の重要性は、若手研究者の生活そのものにも表現されている。9年間の義務教育を終えた後、家族を離れてエフタースコーレという寄宿学校に1年暮らすことや、高等学校を終えた後、親元を離れ大学に行くまでの間にさまざまな経験をすることも一般的だ。Center for Healthy Agingの若手研究者によると、「何がいいか見極めるには時間を十分にかけることが必要だ。デンマークに議論する文化を根づかせた19世紀の哲学者・神学者N. F. S.グルントヴィの精神が今も共有されている」という。

2011年度はとくに、研究成果を人々の日常生活に反映させようとするこうした若い研究者たちと交流しつつ共同研究の場を育てたい。移動という点では閉じているようにみえる環境にあっても、人々がどのように世界を見渡せるのか、世界への回路を開けるのか、それが今年度の私たちの研究課題の一つである。

すずき ななみ

先端人類科学研究部教授。専門は文化人類学、医療社会史。最近の論文に「女性の健康と歴史」(村本淳子ほか編『ウイメンズヘルスナーシング概論［第二版］女性の健康と看護』ヌーヴェルヒロカワ 2011年)、"Popular Health Movement and Diet Reform in Nineteenth-Century America" (*The Japanese Journal of American Studies*, Society for American Studies in Japan 21, 2010)、「コミュニティ創生と健康・治療・食養生：18-19世紀南部におけるモラヴィア教徒の軌跡から」(常松洋ほか編『アメリカ史のフロンティアⅠ　アメリカ合衆国の形成と政治文化：建国から第一次世界大戦まで』昭和堂 2010年)など。